

芥川龍之介聴講ノート  
「支那戯曲講義 塩谷温助教授」翻刻

篠崎美生子・田中靖彦・楊志輝・林颯君・庄司達也

Reprinting Akutagawa Ryunosuke's Note on Lecture  
“The Lecture about Chinese Drama”  
by Associate Professor Shionoya On

Shinozaki Mioko /Tanaka Yasuhiko/Yang zhihui/  
Lin peijun/Shoji Tatsuya

要旨

芥川龍之介は1910年代に東京帝国大学に在学、塩谷温助教授の「支那戯曲講義」を聴講した。本稿では、山梨県立文学館が所蔵する聴講ノート「支那戯曲講義 塩谷温助教授」の翻刻を行い、影印とともに示す。このノートの翻刻を、日本近代の知識人が「中国」に関するどのような「知」と「イメージ」を享受したかを知る第一歩としたい。

キーワード：芥川龍之介 塩谷温 中国 戯曲 西廂記

Keyword : Akutagawa Ryunosuke Shionoya On China drama Xi Xiang Ji

はじめに

本稿は、芥川龍之介の聴講ノート<sup>1)</sup>「支那戯曲講義 塩谷温助教授」(山梨県立文学館蔵)について、その内容を影印で紹介し、翻刻することを第一の目的とするものである。

1892年に誕生した芥川は、20世紀初頭の第一高等学校、東京帝国大学文学部文学に学び、当時第一級の「知」を享受した上で、1910～20年代の日本を代表する小説家となった。芥川の小説テキストに、古今東西の「知」が織り込

まれていることは、これまでの研究でも繰り返し探究され、明らかにされてきたことだが、本稿で取り上げる「支那戯曲講義 塩谷温助教授」もまた、その「知」の生成過程を明かす貴重な資料の1つである。

尤も本稿で行う翻刻は、芥川龍之介の小説テキストのオリジンを尋ねるための作業ではない。日本の近代知識人が、どのようにして「中国」に関する「知」や「イメージ」を取り込んでいったか、そしてどのようにしてそれらを再生産していったかを知るためのひとつのモデルとして、芥川と聴講ノートを扱いたいのである。

20世紀初頭は、戦記や旅行記、ニュースといった形でリアルタイムの「中国」がメディアに登場するとともに、人的交流も急速に深まった時期である。その中で、芥川という作家は、中国を舞台とした小説を数多く執筆するとともに、1921年には大阪毎日新聞社の特派員として中国を約4ヶ月間旅し、またそれをもとに『支那游記』（改造社、1925.11）に収められた諸編を発表している。そうした観点からすれば、「芥川」を、一種のグローバリズム時代を代表する記号として再評価することもできるかもしれない。

「中国」受容という点では、講師の塩谷温（1878—1962、号節山）も極めて重要な人物である。塩谷は、儒家を家学とする家柄の四代目で、東京帝国大学文科大学漢学科卒業後学習院教授を経て、東京帝国大学文科大学の講師となった。そして同助教授時代の1906年から足かけ7年間ドイツ、清国に留学、1912年に帰国するとともに中国の戯曲・小説の研究と講義を進めた。芥川はちょうど帰国直後の塩谷の講義を聴いたことになる。「老儒先生から見れば戯曲小説の如きは文学と認められな」<sup>2)</sup>だった時代のこと、若いエリート青年たちに、塩谷の講義が新鮮に映った可能性は十分にあるだろう。

なお、「支那戯曲講義 塩谷温助教授」で主に取り扱われているのは、中国古典戯曲として最も有名なもののひとつ「西廂記」である。書生張生と令嬢鶯鶯が、侍女の助けを借りつつ幾多の困難を乗り越えて結婚に至るこの物語は、唐代伝奇「鶯鶯伝」にルーツを持ち、宋代、金代に発展、元代に戯曲として一応の完成を見たとされる。

研究史も厚く、今回の翻刻に当たっては、塩谷温の著作をはじめ多くの「西廂記」研究に関する書物を参照した（参考文献）。加えて、上原究一氏（山梨大学・中国文学、書誌学）に多くのご教示を賜ったほか、山梨県立文学館には本聴講ノートの閲覧、撮影に際し、多大な便宜をはかっていただいた。

この場を借りて厚く御礼申し上げたい。

### 凡例

- ・原則として漢字は新字体を採用した。
- ・句読点は、「。」「、」を分け、原文の通りに表記した。
- ・改行については、原則として原文に従った。ただし、字数の制限から2行にわたった箇所もある。
- ・挿入された部分、削除・訂正を施された部分は特に記さず、原文から考えられる完成体を示した。
- ・誤記と思われる場合もそのまま翻刻し、ルビ「ママ」を付した。難読箇所は□で示した。

### 補

本資料では、見開きの片面にのみ記述がある場合と、見開き両面に記述がある場合とがある。本翻刻はそのうち、なんらかの記述があるページにのみ便宜上のページ数を付して影印を紹介し、翻刻を施した。そのため、このページ数は、ノートの総ページ数よりも少ない。

本資料は、最初の6ページまでが横書きで、その後は縦書きになっている。

また、本報告においては「支那」という用語を多用せざるを得ないが、研究上のこととしてご容赦いただきたい。

### ノートについて

縦21.2cm、横17.0cm、厚0.91cm。

ページあたりの行数は23行。総ページ数は、表紙と裏表紙をふくめて118頁。

### (1) 表紙

(2)

(2)

解題

西廂記十則 (琴平町 晩翠軒) (王関本西廂記  
6.60 六元) に

陳眉公批原本西廂記

第六才子書(金聖歎改竄)

(莊子 離騷 史記 杜詩に対して水滸を第五才子書西廂記を第六才子  
書とす 第七才子書として琵琶記次ぐ)

(田中従吾軒 西廂記講義)

唐の元稹(微之)の会真記(唐代叢書)は実  
に西廂記の粉本なり会真記は西張生と崔鶯  
との情事を述べしものにして、後人の説によれば元  
微之自身の事蹟に崔鶯は其表妹にして崔の女  
なり(牡丹亭還魂記の序による)次いで宋の趙令時  
(德隣)に鼓子詞の著あり(北宋の末年の人)其  
体裁は商調の蝶恋花によりて十闋あり

会真記の文を剪断して序伝と為せり

金に至りて董解元(進士一状元)  
(举人一解元)之を改作して擲彈

詞と為せり之を絃索西廂記と云ふ 鼓子詞の鼓  
に合せしに対して之は絃声に合する也 之に至りて脚  
色漸複雑を極め人物亦多きを加へたり.曲多く  
白少くして折なく首尾悉一を為すのみ.

元に至るや王実甫原撰四

関漢卿続撰一 となれり

王は大都の人にして金末より元初に及ぶ

唐

宋

金(南宋中葉)  
金の章宗の時

(3)

(3)

元の鐘嗣成の録鬼簿によれば（其先輩の戯曲を）  
（列挙せるものなり）

崔鶯々待月西廂記雜劇

なるもの王実甫撰十三種中（？）にあり 王、関、共に雜  
劇の大家にして王は時人之を如花間美人

関は之を如瓊筵醉客と云へり（太和正音譜）

（太和正音譜によれば王は13種関は60種あ

り）（其下の批評によれば王は之を極有佳句と云ひ関は之を  
見其詞語可上可下才と云へり王関を抜く数耳）

西廂記は 之を五劇西廂と云ふ 雜劇は皆四折  
よりなるを以て合せて二十折あり

次いで六十種曲本西廂記となれり 百種曲は

（元曲即北曲）明の臧晋淑の著 六十種曲（明  
曲即南曲多く琵琶記等の北曲をも含む）は毛晋の著  
なり、而して一本四折に分かれしを二十折に合せしめ  
毛晋之を南曲の体裁となし六十種曲になせり

是毛晋に始りしにあらず 明の中葉より元曲の亡ぶと共  
に西廂記を二十齣（二折）となし南曲の面目を  
備へしめしなり 陳眉公批原本と云ふものは是也

清に至り金聖歎の第六才子書本出で聊北曲

の体裁に復せしめ、始十六折をとりて続四折清

は是を後人の作として排したり、されど又自好む所  
に阿るの点なきにあらず

登場人物

明

清

(4)



(4)

外（扮）	老夫人	正末	張珙	
正旦	鶯々	淨	法本	僧
（貼旦）	紅娘	（侍婢）	法聰	法本徒弟
淨	鄭恒	（鶯々 <sup>ママ</sup> 許家）	杜將軍	張珙義兄弟
俠	歎郎	（老夫人養嗣）	恵明	法本徒弟
			孫飛虎	壯士
			童	
			僕	

梗概

唐の徳宗の時 崔相国あり 其女鶯々 相国の死  
（直隸）

後 郷里博陵に至り 其屍を葬らむとす。途上河  
中府（蒲関の郡〔山西省〕）に至る 途上豪客多  
きを恐れ之に止る 府に普救寺あり 相国生時修  
復する所僧法本もと相国と相知る 是を以て普  
救寺の西廂に宿し鄭恒を長安より迎へて共に博  
陵に至らむとす鄭恒は鶯々の許嫁なり  
張珙西洛（河南府の人）の産 父は礼部尚書  
に至る 父母共に失ひ今將に挙に应ぜむとす  
其友杜確科挙に应じて雋をしる征西大元帥となり  
蒲関に鎮守す 是を以て珙之を訪ひて旧交を温めむ  
とし河中府に至る 偶旅中の鬱を慰めむとし普救  
寺に遊ぶ 鶯々の紅娘と共に遊ぶを見其美を愛す。  
（西歎<sup>ママ</sup>之を驚艶と題す 見一□）珙一策を設け

(5)

(5)

法本をときて居を寺内に移さ（借廂 見）むとし偶々老夫人の紅娘をして仏事を法本に請はしむるを見之に鶯々を問ふ紅娘諾せず。西鶯々常に夜庭中に炷香す張珙西廂にかくれ詩を賦す 鶯々和す（酬韻是）二月十五日仏事あり。張珙其父母の仏事を共にせむ事を求む（鬧斎）蒲殿の鎮守渾瑊死し人心を失へる丁文雅の立つや人民動乱す孫飛虎 文雅の下に属す。鶯々の美を語るをき、兵五千を率ゐて寺を囲ひ 法本止むを得ず老夫人に告ぐ 夫人鶯々に計る鶯々慟哭一声身を以て賊に投ぜむとす。是に於て夫人堂上堂下の人にして計を以て賊を却くるものには鶯々を与へむと約す 張珙鼓掌して堂に上り杜將軍に書を与へて賊を却けむとす 唯使節なし 徒弟惠明を激して之を為さしむ（寺警）杜將軍即来りて賊を退く夫人張を延きて宴を設く（請宴）夫人心を変じて二人に兄妹を約せしむ 二人共に悲む（離婚）珙 紅娘に計を求む 紅娘之にすゝめて鶯々炷香の時琴をひきて其情をのべしむ（琴心）鶯々亦張珙を忘れず 紅娘をして珙に至らしむ 珙書を鶯々に送る（前候）鶯々之に答ふ（鬧簡）張珙牆を越へて夜鶯々を問ふ 鶯々之を却く（頼簡）珙病む夫人紅娘をして之を訪はしむ 鶯々亦之に書を託す。（後候）遂に二人相会す（酬簡）事露れて紅娘罪を

以上一本

以上二本

以上三本

(6)

(6)

うく（拷艶）紅娘反て夫人を責め遂に張生をゆるさ  
しむ 張珙即去つて拳に赴く（哭宴）一夜草橋店  
に至りて夢む さむれば即河中府の旅店にあり（驚  
夢）

(12)

(7)

元曲

又 雜劇と云ふ 戯曲なり 而して歌劇なり 俗□に劇を唱  
戯と云ひ 之を見るを聴戯と云ふを見て其然るを知るべし  
曲主にして 科、白は其従也曲は 歌曲にして (填詞也) 白  
は即説話なり 科は其所作 元曲のTEOHNIKに云ふ搬演  
なり (役者を賞する詞を嗓子大と云ふ故に曲の巧を要する大なるを  
見るべし加ふるに科白共に多ければ之を演ずるは甚困難なり)  
曲の沿革はこれを略す

<sup>1</sup>三百篇亡而後有 騷賦<sup>2</sup>・・・・難入楽 而後有古楽<sup>3</sup>  
府・・・・不入俗而後以唐絶句為樂府 絶句少  
宛轉 而後有詞<sup>4</sup> 詞不快北耳 而後有北曲北曲不  
諧南耳 而後有南曲 明王世貞

芸苑卮言 (附録)

曲を解するには楽律を知る要あるも先体制より説かむ  
歌舞は上代よりあり 唯古は歌者不舞舞者不歌と云ひて  
歌舞一致せず (詩の国風の如き地方の歌なれば多少の動作は伴ひしも)  
唐に及び梨園の樂に至り漸く歌舞一致し柘枝隊舞の如  
き其一例なれど 一の故事を演ぜしものをきかず 蘭陵王 七徳  
舞の如き僅に当時の風を演ぜしのみ  
宋 趙德隣の鼓子詞に至りては会真記に出づるを  
以て故事を演じたりと云ふを得べし 其商調蝶恋歌  
の体なるはその述の如し されど曲ありて未白なし

1. 詩経
  2. 離騷
  3. □正曲
  4. 填詞
- 詩経の句四言  
漢の句五言  
樂府の樂章は  
長短句を  
以てす  
唐絶句、宋填  
詞、元北曲  
明南曲  
詞曲共に詞譜  
曲譜あり

(∞)



(8)

勾欄即舞台

每折一調

套数一定

一韻到底

金董解元の撥彈詞に至りては曲白共に具り唯科を欠けり。

金には連廂詞（毛西河合集中に擬連想詞あり）

あり 曲白科共に具ふ 司唱ありて之をうたひ樂工数人  
之に伴奏し 未泥且見等の俳優が台に上りて 詞に伴ふ  
所作をなすを常とす 即 未舞者不歌 歌者不舞也。

（毛西河詞話によれば對話は俳優もなせる如し）

元人造曲 即歌者 舞者 合作一人 使勾欄舞者

自司歌唱 而第設箏笛琵琶 以和其曲 每

入場 以四折為度 謂之雜劇 然其時司唱

猶属一人 仿連廂之法 不能遽變（毛西河  
詩話）

先四折について説かむ。

四折は四幕也百種曲及西廂記は元曲の主要

なるものなり、而して之を按ずるに趙氏孤兒の一曲のみは

五折にして他は悉四折なり。各折皆第一折第二折

の数（折に各目を設けず 每折必一調にして

套数も一定するを常とす（仙呂宮の調にして点絳唇  
の套数とするが如し

又一韻到底と云ひ一折同韻なるを常とす

第一折は仙呂宮 点絳唇にて始まるを常とし

例外としては百種曲中仙呂宮入声甘州三あり

(9)

(9)

仙呂宮に依らざるもの一 従つて百種曲中九十五は之に  
従ふ第二折よりは随意也

他に又 楔子 (音屑) を加ふるを得) には序幕と云ひ一には間  
幕と云ふ 四折にて足らざる時或は説明上折首に

設け折間に設く 楔子の数は任意也

故に其性質上楔子は套数をなさず簡單にして

所謂零曲を爲し 中仙呂宮賞花時若しくは端正好、は  
一曲若しくは二曲を用ふ

百種曲中 楔子の数七十二ありて賞花時を用ひるもの  
五十三 端正好十七 例外二あり

又司唱は一人にして 正末にあらずんば正旦を以て之  
に充つ。(南曲は之をゆるす) 但折によりて末旦換はる  
もあれど甚稀なり 之にても一折は一末 or 一旦にうたふ

又題目正名なる七言八言の聯を以てす。外題にし

て最後に設けられ 俳優の場を下りし後に他の者が之  
に代りて唱する也 (但北曲に限る)

漢宮秋についてみるに其題目正名は

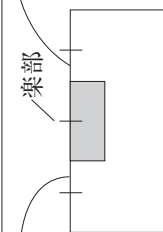
題目 沈黑江明妃書塚恨

正名 破幽夢孤雁漢宮秋

也 更に其体制を見るに 正末劇にして漢の元帝  
是也 正旦は即王昭君冲末は呼韓邪單于 浄は毛  
延寿也

故事を演ずるを以  
て出入口  
を鬼門道と云ふ

鬼門道 (入相)



鬼門道 (出將)

(9)

(10)

第二折 中呂粉蝶兒  
 〃三折 越調鬪鶯鶯  
 〃四折 双調新水令

楔子及四折にして第三折に正末の正旦を送る絶調あり  
 所謂灞橋の送別也。其数□を抜かむ  
 他他他 傷心辞漢王  
 我我我 携手上河梁  
 他部従人窮荒  
 我鸞輿返咸陽  
 返咸陽過宮牆  
 過宮牆遶廻廊  
 遶廻廊近椒房  
 近椒房月昏黄  
 月昏黄夜生涼  
 夜生涼泣寒蛩  
 泣寒蛩綠紗窓  
 綠紗窓不思量 (梅花酒曲の後半)  
  
 呀不思量。 除是鉄心腸  
 鉄心腸也。 愁淚滴千行  
 (収江南曲 前半)  
  
 馬致遠の作也  
 西廂は五劇なるを以て題目正名亦五あり 之をみるに  
 西廂記第一本  
 楔子 夫人 唱 (仙呂 賞花時)  
 正旦  
 第一折 正末唱 (第四折迄之に倣ふ)  
 (仙呂点絳春)

(二)

(11)

題目は 老夫人閑春院

崔鶯々燒夜香

正名は、 小紅娘伝好事

張君瑞鬧道場

聖歎は楔子第一折を合して一となし順次四に至り次いで五六と数へて十六に至れり 陳眉公批の原本は南曲の体裁をなすを以て題目正名なし

次いで宮調につきて一言すべし

樂家の説によれば人声自然の音を五声に分つ

宮商角徵羽是也 五声を調ふるには十二律を用ふ 之を

六律(陽)六呂(陰)に分つ 黃帝の時伶倫樂を作る 昆崙

山陽 谷より竹をとりて笛をつくり 十二律を定むと云ふ

五声十二律を配すれば旋律六十調を得或は五声

の外 變徵變宮を加へ七声としてすれば八十四調を得

べし 夏殷周三代の樂は六十調八十四調の外に出でず

周室衰へてより伶樂亡び漢に及んで武帝樂府

を設け(庁名後世こゝになりし詩の別体を此名にてよぶ)て音

樂を調べしも當時の新声をつくりしのみ 古樂伝は

らず □來新声相次ぎしが唐に至り玄宗自梨

園の弟子に樂を教へたり 是唐の(1)教坊俗樂にし

て、専 歲時饗宴の用に供したり 其他(2)太常

雅樂ありて国家の大典に用ふるを常とす

教坊俗樂は僅に二十八調(樂府雜錄「唐代叢書」)

(12)



(12)

	のみ	宋に及びて教坊の楽は十八調乃至十七調とな
	れり	下つて元に至るや十七調を伝へしも北曲に用
	ひしは	僅に十二調のみ
	元の周徳清の	中原音韻に
1	仙呂宮 (調)	清新綿邈
2	南呂宮	感嘆傷悲
3	中呂宮	高下閃賺
4	黃鍾宮	富貴纏綿
5	正宮	惆悵雄壯
6	道宮	飄逸清幽
7	大石 (調)	風流溫藉 (大石即大食也亞刺比重より来る調也)
8	小石 (調)	旖旎嫵媚 (宋の秦觀の詩を評して小石調の如しと云ふ 旖旎嫵媚なるを云ふ也)
9	高平	條拘濕淅
10	般涉	拾掇坑重
11	歇指	急併虛歇
12	商角	悲傷宛轉
13	双調	健捷激裊
14	商調	悽愴怨慕
15	角調	嗚咽悠揚
16	宮調	典雅沈重
17	越調	陶写冷笑
	すべて十一宮六調也	
	大凡声音各應律宮分六宮十一調共十	

(2)

(13)

七宮調 (大和声韻譜云闕極言皆此表をひく)

此十七調宋時のものと大同小異也 而して北宮は此  
中の十二宮調を用ふ 即

黄鍾宮 二十四体 ○

正宮 二十五 ○

大石 二十一 ○

小石 五

仙呂宮 四十二 ○

中呂宮 三十二 ○

南呂宮 二十一 ○

双調 一百 ○

越調 三十五 ○

商調 十六 ○

商角調 六

般涉調 八

中原音韻及すべての曲譜に体を挙ぐ 最多く元

曲に用ふるは○印也 即五宮四調也 又一に北曲九宮  
と云ふ

北曲は四折を以てなり一折一調 一韻到底として一  
調皆套曲(套数)あり(北詞広正譜)

例せば黄鍾宮の醉花陰に始まり正宮の端正好  
に始まる如し

且第一折は仙呂点紅唇に始まること前記の如し

(14)

(14)

例外	1 <sup>マ</sup>	百種曲をみるに第一折の仙呂点絳唇に始まるもの 九十五 仙呂入声甘州に始まるもの三 仙呂以外 <sup>マ</sup> もの二也 楔子の数七十二仙呂賞花時を用ふるもの五十二 端正好を用ふるもの十七 例外三也 第二折に於て南呂一枝花を用ふるもの三十五 正宮端 正好三十一 第三折に於ては中呂粉蝶兒三十正宮 端好十八 第四折は双調新水冷七十一 中呂粉蝶兒 十六也 其他多く散見するものは越調鬪鶯鶯二十一 商調集賢賓十九とす 故に九宮と云ふもかかる 套曲を用ふるに定まれりと云ふも大過なし 西廂記は之に比するに例外多く体裁や、他と 異り即 楔子に正宮端正好の套曲を 用ひしもの一 (第二本) 故に之を折と称するも可也 殆五折一本をなすに似たり
同	二	第一折には 第五本に商調集賢賓を用ひた
同	三	り 北曲は役者一人なるに西廂には正末正旦以外に 紅娘惠明亦唱曲す是例外の一唯一折は 中一人にて唱ふ

(5)

(15)

星々  
白髪多也  
合は合  
誦也

# 南曲

南曲は規律遙に緩にして折数唱曲者に制限なし套曲を用ひる事なし折に代ふるに齣を用ふ（一に章渠と云ひ音尺と云ふも句と云ひしか）一齣の中に他の調を加へてよく換音自在也 従つて白多く 劇として複雑の度の加はれるを示せり、即北曲の退歩せるにあらずして劇として進歩せるものなり 南曲の例には六十種曲あり 其例をみるに齣数に制限なく多く三十より五十に至る（牡丹還魂記は五十五）且齣下に其名を附す（北曲は折名を用ひず）第一齣は北曲の楔子に当り一、二の掌曲にして 主人公の説話にすぎず故に之を開場 or の家門と云ふ 唱者も亦正旦正末にかぎらず至元末明初。改北曲為南曲。則雜色人皆唱不分賓主矣。（毛西河詞話）例を示せば 琵琶記の第二齣高堂称慶によるに  
双調引子（宝鼎现）

（外）小門深巷。春至芳草。人間清昼。  
（浄）人老去星々非故。春又来年々依旧。  
（旦）最喜得今朝春酒熟。正滿日花開似繡。  
（合）願歲々年々。唯在花下常斟春酒。

生 蔡生  
外 蔡生の  
父蔡公  
浄 蔡母  
旦 趙之娘

(18)



(16)

北曲には題名正名ありしも南曲にはなく唯毎齣

下場詩あり 例せば(同齣)

外 逢時対景且高歌○

浄 須信人生能幾何○

生 万両黄金未為貴

旦 一家安樂值錢多○

即七言絶句を為す。又此下場詩には唐人の集句も

あり 湯臨川の牡丹亭還魂記中の下場詩

はすべて然り 此二齣言據を例とすれば

門前梅柳爛春暉(張竊窈)

夢見君王覺後疑(王昌齡)

心似百花開未得(曹松)

托身須上万年枝(韓偓)

脚色は

北曲

南曲

末(立役)

生

旦(立女形)

旦

浄(悪役)

浄

丑(道化役)

丑

外(老役)

末、生、は粉面に傅彩を施さざるも浄は花面也。

(未完)

注

- 1 芥川の帝大時代の聴講ノートは、10冊現存している。そのうち翻刻作業が進んでいるのは、1点（庄司達也、野呂芳信「芥川龍之介の聴講ノート「欧州最近文芸史 大塚教授 Vol. I」翻刻」（『東京成徳大学研究紀要』2005.3）、「芥川龍之介の聴講ノート「欧州最近文芸史 大塚教授 Vol. I」翻刻（承前）」（『東京成徳大学研究紀要』2006.3）のみ。
- 2 塩谷温『天馬行空』（日本加除出版、1956.7）

翻刻のための参考文献

（塩谷温によるもの）

- ・『支那文学概論講話』（大日本雄弁会、1919.5）
- ・『西廂記』（昌平公司、1947.9）
- ・『歌訳 西廂記』（養徳社、1958.10）

（塩谷温以外の執筆者によるもの）

- ・田中従吾軒『西廂記講義』（東京専門学校、出版年不詳）
- ・国民文庫刊行会編（代表鶴田久作）『国訳漢文大成 文学部第九巻』（国民文庫刊行会、1921.2）
- ・田中謙二編『中国古典文学大系52戯曲集上』（平凡社、1970.11）
- ・狩野直喜『支那小説戯曲史』（みすず書房、1992.2）
- ・黄冬柏『「西廂記」変遷史の研究』（白帝社、2010.2）
- ・国家図書館古籍館編『古本《西廂記》彙集 初集2「鼎鑄陳眉公先生批評西廂記」』（国家図書館出版社、2012.4 ※1911年の石印本『鼎鑄陳眉公先生批評西廂記』を影印の形で刊行したもの。）

付記

本報告は、2016年度科研費助成金事業（基盤研究C・15K02275）「20世紀初頭における「中国」表象の受容・形成・展開についての総合的研究」及び、2016年度恵泉女学園大学平和文化研究所共同研究プロジェクト「中国における近現代「日本」表象の形成と変遷」の助成を受けたものである。